

南アジア史

1

先史・古代

目 次

序章	インド古代史と文化の諸相	山崎元一・小西正捷
1	インド学と古代史研究 インド学の成立　　インド古代史研究の展開	3
2	インド古代史の流れ 考古学の成果　　首長権から王権へ　　王国から帝国へ　　外来民族王朝と土着王 朝　　帝国の再現　　中世初期国家の形成	7
3	インド文化史の解明 古代文化のありかた　　多様性の統一	14
第一章 考古学の成果	南アジア最初の住人たち 猿人・原人の時代から定住まで　　新石器文化——農耕と牧畜の開始	17
1	小磯　学	17
2	近藤英夫	24
インダス文明	文明の版図と存続年代　　インダス文明の形成　　インダス文明の成立　　都市の 規模と形態　　支配者の姿と文明を動かした原理　　交易と工芸　　文明の衰退	17

歴史時代

インダス文明の衰退と地域文化の成立 地域間交流の活発化と地域文化の展開
ガンジス川流域における都市の形成 都市文化の成熟と衰退

第一章 ヴェーダ時代の宗教・政治・社会

藤井正人

1 ヴェーダ時代をどのようにとらえるか

考古資料と言語資料 インダスからガンジスへ 歴史学と文献学

2 アーリヤ人の到来

どこから来たのか 北メソポタミアのインド・アーリヤ人 インド・アーリヤ

人進入の状況

前期ヴェーダ時代

ヴェーダとは 『リグ・ヴェーダ』 『リグ・ヴェーダ』の宗教 『リグ・ヴェ

ーダ』の社会

4 後期ヴェーダ時代

祭式の体系化 王權儀礼 後期ヴェーダの宗教 後期ヴェーダの社会 つ

ぎの時代へ

第三章 十六大国からマウリヤ帝国へ

1 十六大国時代

ガナ・サンガ国 マガダ王国 クル国とパンチャーラ国——王權の停滞 都

91 91

75

65

60

57 57

市の発達と農耕社会

2 マウリヤ帝国の成立

アレクサンドロスの侵入とナンダ朝

マウリヤ朝の興起

アショーカ王とダル

マの政治

統治体制と社会・経済

中央と属州 軍隊と行政組織

社会組織と農業生産

商業と経済統制

4 マウリヤ帝国の滅亡

第四章 外来民族王朝の興亡

1 インド・ギリシア人

インドの範囲と異民族の侵入

バクトリアとパルティアの独立

ギリシア人の

南下 ギリシア人とインド文化

2 サカ王朝・パフラヴァア王朝

サカ族の南下 サカ族と仏教

3 クシャーナ王朝

クシャーナ朝の系譜 カニシュカ王と宗教
ローマ世界との交流 宗教界の

新しい動き 西クシャトラパ クシャーナ朝の終焉

定方 晟

138

133

126 126

119

110

101

第五章 ゲプタ朝の政治と社会

古井龍介

1 ゲプタ朝の政治

- グプタ朝への視座 グプタ朝の起源とその台頭 グプタ勢力の拡大 グプタ
朝の繁栄 ゲプタ朝期の統治機構 危機と失地回復 ゲプタ朝の衰退と滅亡
政治システムの拡大

2 ゲプタ朝の経済

- 都市における商業活動と貨幣経済 農業の拡大

3 ゲプタ朝の社会

- 都市の社会 農村社会 ヴァルナとジャーティ 中世への転機

第六章 カナウジの帝国

三田昌彦

1 ハルシャによる帝國建設

- フーナの侵入と北インドの分裂 プシュヤブーティ朝ハルシャの帝國建設 帝国
の構造と特質 ハルシャ以後

2 プラティィーハーラ朝とパーラ朝

- 辺境からの帝国形成 カナウジ王位継承問題と北インドの霸権争い テーヴァ
パーラの反撃からプラティィーハーラ朝最盛期へ プラティィーハーラ朝の衰退と地
方王権の独立 八~十世紀の国家 六~十世紀の地政的変化とその社会経済的
背景

第七章 宗教・思想史の展開

宮元啓一

1 ヴェーダの宗教

ヴェーダ聖典とバラモン階層 ヴェーダの祭式と神々

2 ウパニシャッドの思想

ウパニシャッドとは 宇宙と自己の真相とは 最初期の輪廻説

3 仏教とジャイオ教の成立

出家、沙門の大量出現 仏教の誕生 ジャイナ教の出現

4 ヒンドゥー教の成立

ヴェーダの宗教からヒンドゥー教へ 二種類の習合パターン ヒンドゥー教徒

の条件

5 ヒンドゥー教の哲学

哲学と学派 六派哲学

6 大乗仏教の成立と展開

大乗仏教の成立 大乗仏教の特徴 大乗仏教の展開

第八章 インド古代美術史論

宮治 昭

1 古代初期の美術と前期石窟

三つの視点 マウリヤ朝からシュンガ朝の美術 仏教説話図と石窟寺院

2 ガンダーラとマトゥラーの美術

北西インドとガンダーラの歴史 マトゥラーの位置と歴史 仏像・ジナ像・ヤ

クシー女神

3

南インドの仏教美術

南インドの仏教遺跡とアマラーヴァティー大塔 南インドの仏像とナーガルジ

ユナコンダの美術

4

グプタ朝の美術

グプタ様式の成立 マトウラーとサールナートの彫刻 グプタ後期のヒンドゥ

ー教彫刻

5

ヴァーカー・カーラ朝の美術と後期石窟

ヴァーカー・カーラ朝の遺跡と彫刻 アジャンター石窟と壁画 後期の仏教石窟と

ヒンドゥー教石窟

第九章 文学史の流れ

叙事詩

二大叙事詩の批判校訂版 叙事詩の古層 英雄詩から倫理・信仰の書へ

『マハーバーラタ』 『ラーマーヤナ』 『マハーバーラタ』から「プラーナ」へ

説話文学

『大説話』の成立 動物説話の流布

3

「カーヴィヤ」とその展開

「カーヴィヤ」とは 小詩と大詩 古典劇とその戯曲 カーヴィヤの形成期
—クシヤーナ期からグプタ期へ 成熟期としての六~八世纪 中世文学の世

1

叙事詩

二大叙事詩の批判校訂版 叙事詩の古層 英雄詩から倫理・信仰の書へ

『マハーバーラタ』 『ラーマーヤナ』 『マハーバーラタ』から「プラーナ」へ

説話文学

『大説話』の成立 動物説話の流布

3

「カーヴィヤ」とその展開

「カーヴィヤ」とは 小詩と大詩 古典劇とその戯曲 カーヴィヤの形成期
—クシヤーナ期からグプタ期へ 成熟期としての六~八世纪 中世文学の世

307

304

294 294

286

282

278

横地優子

第十一章 インドの科学の歴史

1

科学の萌芽

呪術と医学 祭壇の幾何学

2

体系化の時代

天文学 ナクシャトラと太陰占星術 医学の体系化

3

インドにおける科学の確立

西方からの科学の導入 アーリヤバタ ヴァラーハミヒカ アーリヤバタ以

後 インド科学と外来の科学

▼補説▲

1 インダス文字の解説 辛島 昇 49

2 インド考古学を担つた人びと 小西正捷 52

3 ダルマ文献の成立 渡瀬信之 85

4 仏滅年代論 山崎元一

5 アショーカ王碑文とその文字 山崎元一

6 タクシラとマトゥラー 小谷仲男

7 陸路による東西交渉 小谷仲男

8 『マヌ法典』の成立とその後 山崎利男

188 157 153 123 122 52 85

矢野道雄

327

321

318 318

付

- サーマンタ 9
 「ラージプート」の出現と起源伝承 三田昌彦
 古代から中世前期への展開をめぐる歴史観 三田昌彦
 法顯・玄奘・義淨 山崎利男
 ジャイナ教史 宮元啓一
 『バガヴァッド・ギーター』とバクティ 宮元啓一
 仏像の起源 宮治昭
 インドの曆 矢野道雄
 336 291 262 260 221 218 215

録

- 索引(人名索引) 2
 事項索引 2
 地名索引 2
 年表 30
 参考文献 56
 系図 94
 南アジア諸国図 106

函の図柄は、十九世紀オリッサの「ナヴァグンジャラ」。
 九頭を合わせた先史時代以来の複合動物形(フロンス觀)。

第一章 考古学の成果

1 南アジア最初の住人たち

猿人・原人の時代から定住まで

南アジアは初期人類の時代から、ユーラシア大陸の東西を結ぶ要所の地であった。この時代に関する研究は、一八六三年にハンドアックス(握斧)^{ハンド}がロバート・ブルース・フートによってインド南部チエンナイ近郊で発見されたことに端を発し、ヨーロッパや東南アジアであいついだ原人や旧人の化石人骨の発見とも軌を一にする。その後もパキスタン北部インダス川支流のソーアン川やビアース川流域、南部のロフリー丘陵、あるいはインド半島部各地から猿人ないし原人が担つたとされる前期旧石器文化の石器が発見され、今もなお、初期人類の足跡が裏づけられつつある。そのほとんどがおよそ七〇万～二〇万年前と考えられているが、ソーアン川左岸のリワト(國1)では二〇〇万年前に遡るとする指摘もあり、石器の製作技法などの比較検討とともに正確な年代の把握は大きな課題にほかならない。年代測定方法の誤差の問題とともに、多くの石器の発見が河岸段丘の漂砾層中であること、ヒマラヤ山脈の隆起などの地殻変動や氷床の進退が繰り返された複雑な地質構造などが年代決定を困難にしている。

一方、化石人骨については、一九八二年にインド中部ナルマダー川上流のハトノーラで発見された「ナルマダー人」

が進化した原人ないし初期の新人と考えられ、南アジア最古の事例となっている。こうした初期人類が暮した更新世は、南アジアでもサバンナや疎林地帯にウシやスイギュウ、ゾウ、ウマなどの祖先が登場し、温暖な熱帯性気候のもとで狩猟採集生活を送っていたことが想像できる。

この時代の南アジアの石器は、時期的に相前後して地理的にもユーラシア大陸の低・中緯度帯を大きく東西に二分する以下の二つの旧石器文化圏の、ちょうど境界線(一九四〇年に提唱されたモヴィウス・ライン)上に位置している。人類の移住経路や生活環境への技術的適応の実態を探る貴重な資料にほかならない。

(1)は礫器(チョッパー＝チョッピングトゥール)文化で、アフリカのオルドウヴァイなどを起源地とする世界最古の前期旧石器文化である。石材の一端のみに片面ないし両面加工によって刃部をつくりだす。インダス川上流域やインド半島部から東・東南アジアを含むユーラシア大陸東部一帯に展開。南アジアでは最初の発見地にちなみ、ソーアン文化とも呼ばれる。

(2)はアシュール文化で、前期旧石器文化後半に発展した。石材両面のほぼ全体に精巧な加工を施し、側縁に連續した刃部をつくりだす洋梨形や橢円形のハンドアックスが特徴。台形や長方形石器(クリーヴァー)が共伴する。アフリカや西アジア、ヨーロッパ、南アジアではインダス川上・下流域(ロフリー丘陵)やインド半島部から発見され、一時はマドラス文化とも呼ばれた。

南アジアでは、先行していたソーアン文化に一部重複するようにアシュール文化が拡散していくのが基本的な理解であるが、両者の技術的関連性については検討課題も多い。とくに礫器・ハンドアックス・クリーヴァーの三種の大型石器の遺跡・地域ごとの組成の割合を、時期差のほか生態適応の差や発展段階の差など、どのように解釈するかは容易ではない。製作址でもあるチルキー・ネワーサーやフンスギ、層位的に発展の様子が把握可能な岩陰遺跡のビームベートカーやアーダムガルなどが(いずれもインド中部)、今後の分析の軸となるであろう。

その後、剝片を多用した中期旧石器文化、さらには細かな石刃技法とともに骨製の地母神像やビーズほかの装身具など、精神活動・芸術活動がより明確化する後期旧石器文化をへて、南アジアでは中石器文化が台頭する。この文化は、細石器と呼ばれる数センチ程の小型の半月形石器や台形石器、石刃や尖頭器などを特徴とする。それは最後の氷河期をへて温暖化していく新しい環境への適応を示し、遊動的な狩猟採集社会から徐々に定住化して、ウシなどの家畜飼養や植物栽培を試みた社会への移行期として位置づけられる。ただしとくに南アジアの場合にはそのプロセスは地域的ながらつきが大きいだけでなく、年代も前九千年紀から前二千年紀にまでおよぶ。

このうち前九千年紀に遡る事例としては、ガンジス川中流域のサラーライ・ナハル・ラーライやチョーパニ・マンドーが知られる。柱穴や炉址をともなう住居址や墓地、手捏ねの土器が出現し、前者の遺跡から出土した野生のイネが注目される。また前五〇〇〇年頃にはインド西部のバゴールや中部のアーダムガルでヒツジ・ヤギやウシの飼育が試みられていた。さらにこの時期には、ビームベートカーなどの各地で、狩猟など当時の生活の様子や儀礼的な意味合いを示す絵画が岩陰や洞窟に描かれたことが注目される(図2)。

一方、前二〇〇〇年前後まで存続するインド西部のバゴールやラングナージでは、銅製ナイフや鐵などが発見されている。これらは地理的に隣接し、時期的にも並行するインダス文明から交易によってもたらされたと考えられる。すなわちこうした中石器文化は準貴石など各種資源の採集や獲得を担い、それらを文明内で製作された銅製品などを交換することで共存共榮の関係にあった。ラングナージの墓から出土した人骨の近年の分析によれば、インダス文明の人びとの混血があつたことさえ指摘されている。

新石器文化——農耕と牧畜の開始

さらに前七千年紀から前二千年紀にかけての各地では、定住と農耕・牧畜を基盤とする食糧生産経済への道を歩んだ

いくつもの新石器文化があいついで成立した。その多くは、インド・パキスタンの分離独立以降の調査によつて明らかにされた。

バローチスタン山麓 なかでも南アジアの初期農耕村落が前七千年紀にまで遡ることを明らかにしたのが、一九七〇年代にパキスタン西部のバローチスタン丘陵山麓で発見された、メヘルガルの発掘成果である。農耕・牧畜が必ずしも西アジアからの伝播ではなく、西方と同じ野生の動植物が生息する生態学的環境のなかで、南アジアでも独自に試みられた可能性がこうして指摘されるようになった。

最初期のメヘルガルⅠ期は土器出現前の集落で、日干レンガを積み上げ、複数の部屋に分かれた住居のほか、複数の小部屋をもち貯蔵庫と考えられる建物をすでにもつっていた。生業面では冬作物で栽培種の各種オオムギやコムギ、インドナツメのほか夏作物のナツメヤシが確認されており、通年で栽培活動がおこなわれていたことを示す。動物もヤギやヒツジ、ウシ、スイギュウなどが野生種から徐々に家畜種へと移行している。「これらのうちウシは多數を占め、今日の南アジア北西部の生業を特徴づけるウシの飼育とムギ類の栽培を基盤とする有畜混合農耕が、早い段階で確立した」とを物語る。

またビーズなどに用いられた海水産の貝やトルコ石、ラピス・ラズリは、アラビア海や中央アジア方面など遠隔地との交易の証左となつてゐる。一方で、素朴な形状の女性土偶や墓の存在は、新たな信仰や精神世界の萌芽を示す。

こうした新石器文化の村落は、メヘルガルⅡ期の前五千年紀頃にはクエッタ近郊のキリ・グル・モハンマドや、やや北方のローラーラーイー地方のラーナー・グンダイなどバローチスタン丘陵の各地に展開し、交易関係を維持しつつ、それぞれに地域性の強い彩文土器によつて特徴づけられていく。口クロ挽きの土器があらわれ、木製の柄にいくつもの石刃を瀝青で固定した鎌や各種貴石製ビーズ工房、技術的にはすでに金石併用期を迎つたことを示す銅製のビーズなども登場し、農耕・牧畜社会が順調に発展していた様子がうかがえる(図3)。南アジア最古となるワタも確認さ

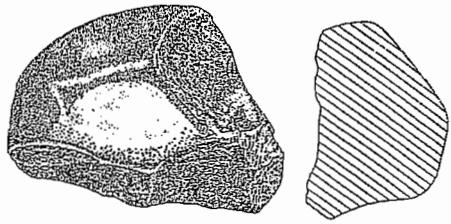


図1 リワトで発見された南アジア最古とされる礫石器

〔出典〕 Allchin and Dennell 1989, p. 12.

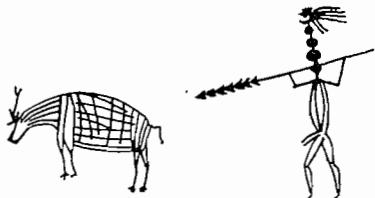


図2 狩猟の様子を描いたビームベー
トカーの岩壁画

〔出典〕 Agrawal 1982, p. 79.

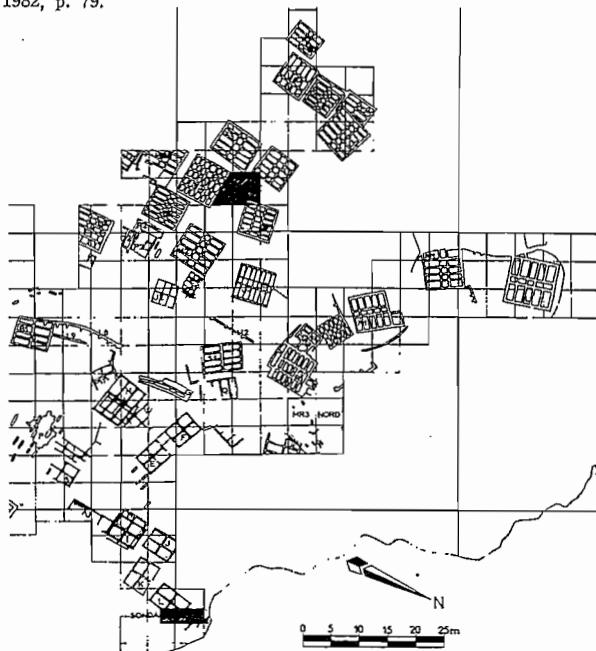


図3 メヘルガルII期の集落 複数の小部屋をもつ建物が林立
する。

〔出典〕 Meadow 1989, p. 168.

れている。

メヘルガルⅢ～Ⅴ期にあたる前五千年紀末から前四千年紀末頃になると人口が増加して集落が拡張するとともに、土器の大量生産が始まる。またアフガニスタンからパキスタン南部にいたる非常に広い範囲に分布する、動物文様や細かな幾何学文様を特徴とするトガウ式土器やケチ・ベーグ式土器が見られるようになる。金や凍石、ファイアンスなどの加工や製作技術の高まりや、アフガニスタンや中央アジア方面と関わりをもつ区画文印章の出土もまた、遠隔地との交流がより活発になったことをうかがわせる。またやや北方のゴーマル平原やバンヌー盆地などが新たに開拓され、シェリ・ハーン・タラカイやグムラーなどの村落が築かれた。とくに前三千年紀初頭のタラカイ・キラーでは、コムギやオオムギに加えレンズマメとエンドウが確認され、ウシ、スイギュウ、ヒツジとヤギとともに現在の南アジア北西部の生業に共通するすべての要素がそろつたことを示す最初の例として注目される。

インダス平原 一方、ほぼ同じ頃には山麓部を離れてインダス平原にも人びとが本格的に生活の場を広め、新石器文化が浸透していく。すなわち北方ではタクシラに近いサラーライ・コラー(Ⅰ期)や、インド北部からインダス平原へとかつて流れ、現在涸河床となっているガッガル・ハーラー川流域のハーラー文化がそれである。その多くは、当初はウシの遊牧とわずかなムギ栽培をおこなう遊動的な性格の強い生活であったものの、インダス文明の経済的基盤がこの時期から徐々に準備され始めていたといえる。

カシユミール地方 この地方では前三千年紀前半以降になつて、ブルザホムやグフクラールに人びとが暮し始めた。栽培種のコムギやオオムギ、レンズマメやエンドウとともに家畜種のヒツジとヤギが見られ、ここでも今日の生業の基礎が形成されつつあった。人びとは数メートルの深さに掘り下げられた円形や長方形の地下式竪穴に住まい、磨製石斧や錐、石杵や石臼などの石器、尖頭器や針、鉛先などの骨角器が日用品であった。

前二千年紀前半頃になるとイネが登場し、地上に泥や日干レンガの住居が建てられるようになる。^{瑪瑙}や紅玉髓製ビ

ーズ、銅製鍛などは、インダス文明から交易などでもたらされたものかもしれない。一方、穂積具とされる「石包丁」をめぐっては、中国の黄河流域の仰韶文化との関連が指摘されている。

ガンジス川流域へアッサム地方へこれらの土地では、前述の中石器段階から手握ねの土器や石臼や磨石をすでにもち、無土器新石器の段階をもたないまま、栽培・家畜化が始まる前二千年紀以降の新石器段階へと移行する。繩目文や磨研が施された土器、石槌や環状石製品などの磨製石器を特徴とする。他の地方より大幅に遅れて農耕が成立した背景には、当初はムギやイネなど十分な余剰生産を産む栽培植物が存在せず、狩猟採集社会が長くつづいたことが要因の一つであつたろう。

注目されるのが、前二千年紀前葉(当時は前五千年紀まで遡ると報告された)のコールティハワーやマハーガラから発見された栽培種のイネである。イネは前二千年紀前葉のインダス文明南東端に位置するグジャラート地方のロータルとラングブルからも出土しており(栽培種であるかは不明)、この頃までにインド北部一帯にイネが分布していたことは間違いない。もつとも、当時のガンジス川中流域一帯はいまだジャングルに覆われ、焼畑などによって細々と栽培をおこなう状況であつたろう。また野生のシカやイノブタとともに家畜化したウシ、ヒツジやヤギの骨が出土し、狩猟採集と農耕・牧畜すべてによつて生活が支えられていたことがわかる。このことは、やがて前六世紀以降にこの地で勃興する第二の都市化の生業基盤が、前二千年紀には整えられ始めていたことを物語る。

さらに入ンド東部のアッサム地方やオリッサ地方の新石器文化では、前二千年紀(一部は前五千年紀に遡るか)から前一千紀にかけて、繩目文や線刻文などが施された土器にともない、有段石斧や有肩石斧といった特徴的な形状の磨製石器が見られる。これらには、四川・雲南地方や東南アジアとの関わりが指摘されている。またオリッサの一部でも栽培種のイネが確認されている。

インド南部 インド半島のデカン高原南部一帯の広い範囲にも前三千年紀以降新石器文化が生起し、前10000年

頃まで存続した。とくにその後半ではデカン高原北部で前二千年紀に成立した金石併用諸文化と接触し、剣など多くの銅・青銅製品が登場する。

この時期のデカン高原南部は、アッシュ・マウンドと呼ばれる直径数十メートル程の灰土の遺丘によつて特徴づけられる。これは積み重ねた大量の牛糞を、おそらくは儀礼的に繰り返し焼いたものと考えられ、隣接する柵廻いや家畜小屋の内側にはウシの蹄跡が多數発見された。ともに、ウシに依存した牧畜生活の証跡である。ヒツジとヤギも家畜化されていた。その反面、植物栽培の痕跡はない。手握ねの灰色や赤色の磨研土器をもち、石突部が丸く尖る磨製石斧や細石器も必需品であった。はつきりとした建物の痕跡はなく、岩山の平地や岩陰に住んでいたと考えられる。

後期になると動物骨のほとんどをウシが占めるようになり、荷役に用いられ、また肉が食べられていたことが明らかにされている。このほか、おそらくは北方からもたらされたウマやロバが注目される。一方、シコクビエや一部のマメなど、限定的ながら栽培に関する証拠も得られている。ここでもまた、狩猟採集とともに栽培・牧畜をともなう混合経済がおこなわれていたらしい。

また葬制については、成人を伸展葬、子どもを^{かぶ}覆棺葬とするのが特徴で、デカン高原北部の金石併用諸文化との交流をうかがわせるとともに、インド中・南部全域で前一千年紀に成立する巨石文化の一部にもその伝統が受け継がれていた。

小磯 学

2 インダス文明

文明の版図と存続年代

インダス文明は、一九二一年のD・R・サハニーによるパンジャーブ地方のハラッパー遺跡の調査と、翌二二年の

R・D・バナルジーによるシンド地方のモエンジョ・ダロ遺跡の調査とによって発見された。発見以来八〇年をへて、文明の形成過程やその社会構造が少しづつではあるが明らかとなつてきている。

今日確認されているインダス文明遺跡数は一〇〇〇を超えており、その分布はインダス川流域を中心とした現在のパキスタンのほぼ全域を越えて、東西一六〇〇キロ、南北一四〇〇キロの範囲でインド亜大陸の北西部に広く分布するところが明らかとなつていている。すなわちその遺跡分布は、インダス川本支流域のみならず、インダス川よりさらに東の東部パンジャーブ地方やラージャスター地方のガッガル・ハークレー涸河床流域、そして南東のグジャラート地方においている。この版図内に、モエンジョ・ダロ、ハラッパー、カーリーバンガン、バナーワリー、ドーラーヴィラー、ロータルなどの都市遺跡が存在する。さらには、マクラーン沿岸のソトカーデン・ドールや、ヒンドウークシユ山脈を越えて中央アジアに程近いアフガニスタンのショルトゥガイのよう、アウト・ポストというべき遺跡も存在する(図4)。こうした広大な版図から、インダス川流域に限定されかねない「インダス文明」という呼称が実態と離れているといふことで、近年では文明の示準遺跡であるハラッパー遺跡の名を冠して「ハラッパー文明」と呼ぶことも多くなっている。呼称はさておき、遺跡の分布から見て、インダス、ガッガル・ハークレー両河川が開拓した、大沖積平野における農耕生産がこの文明の存立基盤となっていたことは確かである。

農耕生産は、コムギ、オオムギそしてマメ類とナツメの栽培、加えて、ワタやアマといった纖維植物や、メロンなどの果実も栽培されていた。家畜は、ヒツジ、ヤギ、ウシ、スイギュウの飼育を中心としたものであった。こうした作物・家畜体系は、文明版図の主たる気候が年降雨量で五〇〇ミリ程、あるいはそれ以下の半乾燥の気候であったことを示している。農作物について加えると、版図南東部のグジャラート地方では文明後期に、モロコシなどのアフリカ起源の雑穀の栽培が、麦作とあわせておこなわれていたことが確認されている。雑穀は、後述する対メソポタミア交易の過程でもたらされたものと考えられるが、これら雑穀栽培は、インダス川やガッガル・ハークレー涸河床流域にはおよん



図4 インダス文明遺跡分布図

ではない。

文明は前二六〇〇年から前二五〇〇年のあいだに成立し、前一八〇〇年頃まで存続すると考えられるが、これは他の遺物とのクロス・データイング、さらにメソポタミアの文献にあらわれたインダス文明を指すと考えられる「メルッハ」の記述(後述)の内容、そして諸遺跡から得られた¹⁴年代測定値から導かれたものである。文明は広大な版図をもつが、およそ七〇〇年という存続期間のあいだにいくつかの段階をへた形成過程があつたと考えられるし、同様に、文明が縮小・解体していくときにもいくつかの段階があつたことであろう。しかしながらこうした文明版図内の個別の地域の動態は、現在、必ずしも明確にはなっていない(表一)。

インダス文明の形成

それでも文明の形成過程については、昨今少しづつではあるが明らかとなつてきている。文明発見当初、一九三〇年代には情報量の少なさもあって、インダス文明はインド亜大陸外の地からもたらされたと推測されたこともあつた。しかしその後の調査で、インダスとガッガル・ハークラー西河川が開拓した大冲積平野、すなわちインダス平原そのものにインダス文明に先行する文化をもつた諸遺跡が存在することが明らかになり、文明成立以前、前四千年紀中葉以降には麦作農耕社会が発展的に展開していくこと、また広範な交易ネットワークがすでに存在したことが明らかとなつてきた。今日ではこれら諸文化が担つた地域開発を基礎として、文明形成がなされたと考えられている。

インダス平原に展開した諸遺跡は相互に関連し合い、複雑な文化展開を見せるが、整理するとインダス文明成立以前には、以下の二つの文化段階を設定することが可能であろう。

まずはその第一段階として、前四千年紀後半～前三千年紀初頭、インダス川流域とその周辺域に、パンジャーブ地方のラーヴィー文化、北西邊境州のトーチ・ゴーマル文化、シンド地方からラージャスター地方にかけてのハークラー

	インダス	アラビア湾岸	メソポタミア
前7000	初期農耕文化期		
			ウバイド期
前3500	第一段階 ハーフラー/ラーヴィー文化 トーチ・ゴーマル文化 メヘルガルV期		ウルク期
前3000	第二段階 (初期ハラッパー文化期) コート・ディジー文化 ゾーティ・シスワル文化 メヘルガルVI・VII期	ハフィート文化	ジェムデッド・ナスル期 初期王朝時代 I
前2600	(移行期)	ウンム・アン・ナール文化	II
前2500	インダス文明期 前期	ウンム・アン・ナール文明 (マガン国)	III
	中期	バールバール文明 (ディルムン国)	アッカド王朝時代 ウル第Ⅲ王朝時代
前2200	後期		イシン・ラルサ時代
前1800	後ハラッパー文化期		古バビロニア時代

表1 インダス文明関連年表

文化など、独自の彩文土器をもつ地域的村落文化が展開する。これら諸文化は農耕生産に基礎をおいていることが確認されているが、その集落規模はまだ小さなものであった。一方で、交易活動は地域を越えておこなわれていた。例えばハラッパー遺跡最下層のラーヴィー文化では、幾何学文を刻した方形印章の出土や、海水産の貝を用いた腕輪製作などが確認されており、それを証拠立てている。

第二段階は前三千年紀前葉～中葉であり、多くの遺跡で第一段階から断絶なく移行する。集落規模は大きくなり、インダス平原のラフマーン・デーリ、ハラッパー、コート・ディジーなどの遺跡では周壁の存在が確認されている。この第二段階では、地域的村落文化がそれぞれの地域性を残しつつ、相互の文化的連関がより緊密になる。各地の地域的村落文化は、在地の土器を残しながら、コート・ディジー式土器の器形と彩文を共有するようになる。グジャラート地方のスールコーダー遺跡にもこの種の土器が見られ、コート・ディジー式土器の器形と彩文の分布範囲はインダス平原を越える。この分布範囲は、のちのインダス文明圏とかなりの部分で重なる。さらに諸遺跡の石器など、土器以外の遺物に近似性が認められる点をとらえ、M・R・ムガルはこの段階を、「初期ハラッパー文化期」と呼んでいる。

この段階には、インダス文明につながるさまざまな事象が認められる。まず注目されるのは、インダス平原とその周辺域にある種の共通の信仰が確立したことが見てとれることである。有角の動物やスイギュウの頭部を表現した彩文、インドボダイジュの葉をあらわした彩文、そしてスイギュウの角と植物が組み合わさって表現された彩文、これらが広範な地域に分布し、コート・ディジー式土器の器形と彩文の分布範囲と同一の広がりを見せており。オーチン夫妻はこれら一連の事象から、第二段階、すなわち初期ハラッパー文化期を、インダス平原とその周辺域に角と植物に対する共通信仰が確立した段階ととらえている。この信仰表現は初期ハラッパー諸文化期の最終段階で、やがて人物像と結びついてくる。カーリーバンガン出土の土板に描かれた、「角と植物を頭部から生やした人物」の線刻画がそれである。これは神格が付与された人物の出現ととらえてよく、のちのインダス文明に引き継がれる重要な要素である(図5)。

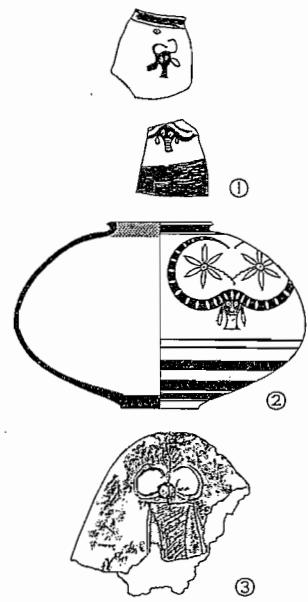


図5 角と植物の信仰 初期ハラッパー文化期 ①グムラー②コート・ディジー③カーリーバンガン

牛車や船が登場するなど運輸の技術的革新が興ったことも、第二段階の特徴である。新技術の出現は、この時期に交易ネットワークがより活発に、広範に動き始めたことをより強く推測させるものである。加えて、第一期の諸遺跡からすでに出土している印章が、各遺跡でこの段階でその数を増すことも明らかとなつており、交流の活発化を裏づけている。また、主要利器である石刃・石材が、旧来のバローチスタン丘陵およびその周辺域原産のものから Sind 地方の口フリーチ丘陵産に切り替わり、広く分布することもこの段階の特徴である。

これら一連の事象は文明成立への胎動とどちらえることができるが、すべての遺跡がつぎにくるインダス文明へと移行したわけではない。すなわち各遺跡の層位的調査の進捗により、ラフマーン・ティー、サラーライ・コレー、ジャリールブルなど、第一段階から継続していた 100~200 ヘクタール前後の規模をもつ拠点的集落のいくつかが、第二段階での活動を停止することがわかる。一方、第二段階の時点では、5 ヘクタール以下の比較的規模が小さな遺跡であったグムラーやコート・ディジー、カーリーバンガンなどが文明期にまで継続していく。そしてのちにカーリーバンガンが都市化することが示すように、この時点で、新たな地域に拠点がつくられたと考えてよい。これは、文明成立にあたって各地域の集落の再編がおこなわれた結果と見てよく、G・ボセールはこの再編がおこなわれた時期を、文明への移行期

とどちらえている。

この集落の再編をへたのちに、文明、すなわち都市を擁した社会が成立する。オーチンやポセールは、都市成立は前二六〇〇年から前二五〇〇年のあいだのどこかで、短期間に急激に起つたものと考えている。社会再編を主導し、共通信仰の頂点に立つた最初の都市がどこであるかはなお未解明であるが、都市の規模や施設、出土遺物などから、その可能性がもつとも高いのはモエンジヨ・ダロである。

インダス文明の成立

文明はこのような経緯をへて成立するが、そこでは以前には見られなかつた、八〇ヘクタールを超えるような大規模な都市遺跡が出現する。またそこでは、例えばモエンジヨ・ダロの大沐浴場や、ドーラーヴィラーにおける市の四分の三を囲う巨大な貯水槽、そしてロータルの「ドック」などのように、大規模で複雑な構造の、記念建造物的性格のあらわな遺構が出現する。遺跡の規模が飛躍的に大きくなることや、以前には見られなかつたような遺構があらわれることは、文明の成立が初期ハラッパー諸文化期からの漸移的変化ではなかつたことを物語つている。これまで見てきたように、前段階での社会開発を受けて成立することは了解されるが、文明への最後の飛翔の様相はなお未解明のままである。

城塞と市街地の区分、道路、排水溝などの遺構は他の都市でも見られ、総じてインダス都市の特徴としてよい。文明が衰退し都市活動が停止すると、これらの記念建造物的性格の遺構や大規模な道路、排水溝などは放棄されることは、諸遺跡の発掘で明らかとなつてている。

都市の様相がもつともよくわかっている遺跡は、シンド地方のモエンジヨ・ダロである。モエンジヨ・ダロは計画都市で、城塞と市街地という二つの区画から構成されている。城塞部からは大沐浴場、穀物倉、学問所、会議用広間など大型の建物が発見され、市の行政を司るセンターと考えられた。一方、市街地は幅九メートルの大通りと、中小の通り

によつて碁盤の目状に区画され、通りには排水溝が配されていた。家屋は密集して建てられていた。その人口は最盛期には三万～四万人にも達していたとの試算もあり、少なくとも市街地の人口密度は極めて高かつたように思われる。家屋には、数十室をもつ大家屋から長屋と呼ばれる数室しかもたない家屋まであり、社会階層差や貧富の差があつたことが認められる。また工房や商人宿も確認されており、活発な手工業生産や商業活動がおこなわれたことを示している。他の都市の生活様相は断片的資料しか提示されておらず、その復元は今後の課題となつてゐる。

つきゞゝ、遺物について見ていく。文明の成立は、新たな様式の遺物群の登場を見る。遺物群は、印章、ハラッパー式土器、種々の石器、石製品、金属器(銅・青銅製品)、金属や貴石を用いた装身具、土偶、日干・焼成レンガ(縦・横・高さが四対二対一の比をもつ)、そしてインダス文字板などで構成される。これらの遺物の多くは初期ハラッパー文化期にその祖形が見られるものの、文明期に型式的完成を見たもので、遺物群はインダス様式と総称されるべきものである(図6～8)。個々の遺物の型式の確立は、とりもなおさずこれら遺物の製作にかかる専業集團ができあがつたことを示してゐる。

従来は一括りに語られてきた遺物群を、日常品と、奢侈品など支配と結びつく遺物とに分けて検討していくことも必要であろう。インダス様式の遺物群のうち、金属器(銅・青銅器)、紅玉髓など貴石製の装身具やファイアンス、石製の彫像(神官王像など)——これらの奢侈品は、支配者もしくは支配者層と結びついた遺物である。印章やそこに刻されたインダス文字、また統一された度量衡に基づく分銭や尺なども、同じく支配者と結びつく遺物と見てよい(図6)。

奢侈品の多くは、製作にいざれも高度に洗練された技術を要するものである。一例を紅玉髓製ビーズの製作にとれば、近年の製作復元実験では、加熱処理を繰り返すなど複雑な工程があつたことがわかつてゐる。こうした製品は都市支配者によって管理され、都市を特色づける交易品となつていった。文明の奢侈品の多くが都市衰退後には見られなくなることがわかつており、この点から都市支配者と奢侈品製作の専門工人との関係が見てとれる。



図6 インダス文明 遺物 ①神官王像②インダス印章③紅玉髓製ビーズ

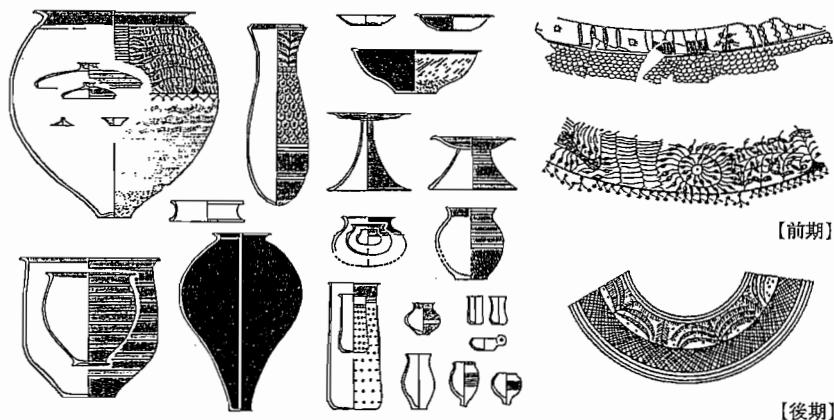


図7 インダス文明 土器と彩文 (縮尺不同)



図8 紅玉髓製ビーズ (ウル出土)

図6～8：各報告書に基づき
近藤英夫・小茄子川歩・米山あかね作図

一方、土器などの日用品は、文明衰退後も村落文化のなかで型式変化を起こしながら引き継がれていく」とも明らかになつていて、その意味でも、日用品と奢侈品とは分離して議論する必要がある。

さて、専門の工人が奢侈品製作をおこなつた場所であるが、具体的には明らかにされていない。しかし当然それは、城塞内もしくは近接した位置にあつたであらう。その可能性のある場所として、ハラッパーでは城塞の北側外に展開する円形作業場・穀物倉・労働者長屋のユニット、さらに、ドーラーヴィラーにみられる城塞西の「ベイリー」(中庭)内の工房群などが注目されるところである。両遺跡とも現在調査が継続中であり、そこでどのような作業がなされたのか、今後の調査の成果に期待したい。

また、この遺物群に関しては、文明が広範な版図をもつにもかかわらずあまり地域差をもたない」とや、型式変化が少ないことが知られている。長く、この画一性と保守性とがインダス文明の遺物群の特徴であるといわれてきた。しかしながら、例えば土器を精査すれば、彩文構成は少なくとも前・後の二時期に分けることが可能であるとか、インダス式ゴブレットは製作技法も少なくとも三時期に区分可能な変化をすることが指摘されており(図7)、文明の存続期間中、型式的変化がまつたくなかつたというわけではない。むしろ画一性と保守性が強調されるあまりに、この分野での研究が停滞していたというのが実情であろう。このことは地方差の追究についても同様である。この面での見直し作業もまた、今後の大きな課題である。

都市の規模と形態

画一性と保守性を見直す議論は、文明をもつとも特徴づける都市遺跡についても必要である。文明の版図中には、少なくとも六つの都市があることはすでに述べた。六都市は、いずれも、城塞と市街地とをもつ計画都市であることが知られている。

これら都市には、大小の規模の差が認められる。最大のものはモエンジョ・ダロとハラッパーであり、八〇ヘクタール強の面積である。つぎがカーリーバンガンとバナーワリーであり、約二〇ヘクタール前後の面積をもつ。ドーラーヴィラーも、市街を取り囲む貯水槽を除いた居住面積は二〇ヘクタール弱となる。ロータルはさらに規模が小さく、五ヘクタールである。このように見てくると、都市は、およそ四分の一の比で規模差があることがわかる。ここから、モエンジョ・ダロ、ハラッパー両遺跡を頂点とする文明社会の構造が見えてくる。このことはインダス文明の社会は、相拮抗する都市国家群が存在するメソポタミアとは違った社会構造であったことを示している。

さらにこれら都市は形態にも差異が認められる。文明の都市は、城塞と市街地の二つの部分からなることが知られているが、その城塞と市街地の配置の仕方で、分離型と一体型の二類に大別可能である(図9)。すなわち、

(1) 分離型 城塞が西に、市街地が東にそれぞれ離れて位置するもの(モエンジョ・ダロ、ハラッパー、カーリーバンガン)

(2) 一体型 城塞と市街地が接しており、全体が壁で囲われるもの(ドーラーヴィラー、ロータル、バナーワリー)

分離型と一体型の遺跡分布を見ていくと、分布域の違いに気づく。分離型は、インダス川中・下流域と、ガッガル・ハーカラー涸河床の中流域に分布する。一方、一体型は、グジャラート地方やガッガル・ハーカラー涸河床域でも、上流域に分布する。

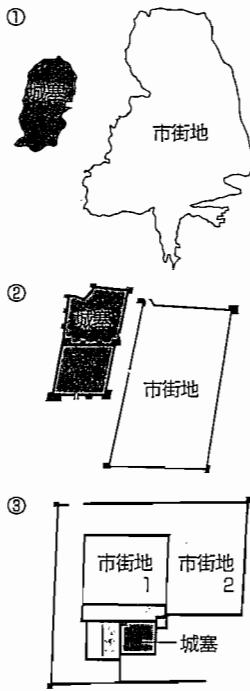


図9 一体型と分離型の都市プラン(縮尺不同)

①モエンジョ・ダロ②カーリーバンガン③ドーラーヴィラー

初期ハラッパー諸文化が展開し、コート・ディジー式土器の彩文と器形、そして角と植物の信仰を共有したいわば文明の故地といえる地域に、分離型の都市は存在する。一方、一体型はその外側の地域に存在する。都市形態の違いは、インダス文明が版図を拡大していく様子を示していると考えられよう。

冒頭に指摘したように、インダス都市には規模差、形態差が見られ、決して画一的ではないことがわかる。規模の差は、インダス都市群が、モエンジョ・ダロとハラッパー両遺跡を中心として大きな社会構造体をつくっていた可能性を示唆するものである。各都市は、それぞれの地域で交易拠点や産業センターの役割を担い、中枢と結びついていたと考えられるのではないか。例えばロータル遺跡は、近隣に紅玉髓やその他の貴石の原産地があり、文明の主要産業の紅玉髓ビーズなどの装身具製作をおこなっていたことがわかっている。また、都市ではないが、インダス川河口部のバーラー・コート遺跡は貝製品の製作センターであったことが明らかとなっている。また、マクラーン沿岸のソートカーゲン・ドールは、文明がおこなった海洋交易の拠点として機能していた。こうしたさまざまな役割を、各都市、さらには各遺跡が担い、文明中枢と結びついていたのである。

支配者との姿と文明を動かした原理

文明の支配原理や支配者の姿についていって、この文明にはメソポタミアに見られるような神殿や王宮の存在が確認されていないことから、かつては「民主的」な社会とらえる考え方もあった。しかし、この点についても見直しの議論が進んでいる。

モエンジョ・ダロの城塞部には、大沐浴場と呼ばれる遺構が存在する。大沐浴場は、その位置と構造から、儀礼の場であつたろうと考えられている。この大沐浴場に隣接して、穀物倉といわれる大型の遺構が存在する。大沐浴場と穀物倉との位置関係に注目して、両遺構が組み合わさったものを神殿的施設、いわば「インダス型神殿」とするという考え方

がある。この考えに従えば、インダス文明は神殿をもたなかつたのではなく、メソポタミア諸都市に見られるようなスタイルの神殿をもつていなかつたということであり、形態は違つても神殿は存在していいたといふことである。そうすると、神殿の形態こそ異なるが、そこにはある種の神殿経済が機能していたということになる。

このようにして見ると、インダス文明もやはり他文明と同様に、聖俗の力をあわせもつた支配者をいただいていたとすることができよう。大沐浴場と穀物倉のユニット、すなわち、「インダス型神殿」はモエンジヨ・ダロ遺跡にのみ見られる遺構であり、規模・形態がほぼ同じであるハラッパーでは発見されていない。ここから、モエンジヨ・ダロが文明の頂点に立つ都市であった可能性が指摘できる。

「インダス型神殿」に祀られる神の姿はといえば、印章に刻された、頭部に角と植物を生やし、腕いっぱいに腕輪をつけて結跏趺坐する神の図柄がそれであると考えられている(図6-1②)。そうであれば文明の宗教は、文明以前の社会に確立していた共通信仰、すなわち、角と植物信仰体系の系譜を引き継いでいることになる。

「インダス型神殿」で沐浴の儀礼をおこない、聖なる世界の神と交接をした人物が、同時に文明の支配者であったことは疑いない。おそらくは「神官王」と呼ばれる石灰岩製人物像(図6-1①)が、容姿やまとった衣装、またそこにつけられた三つ葉文様などから、支配者の姿をあらわすものかと考えられてきたが、支配者の機能、王権の具体的な性格についてはまったく不明である。ただし、その性格や系譜が不明といつても、広大な版図に計画都市を開拓したこと、かつそのプランを長期にわたって維持したことなどから考えて、支配者の権力は決して脆弱なものではなかつたと考えられる。

文明は独自の「インダス文字」をもつが、文字と支配の関係についてもよくわかっていない。インダス文字は今日なお未解読であり、約四〇〇種が確認されているがほとんどが短文で、人名もしくは神名をあらわしたものかと推定されている。文字が描かれるのは主として印章上で、この文字を用いた長文の文書などは発見されていない。この点でも、

文字が支配の道具として機能したメソポタミア諸都市の場合との違いが見てとれる。ただ、ドーラーヴィラーの城塞北門には、インダス文字を一〇個配した木製の看板が出土している。これは、都市支配者を象徴するものとして文字があり、かつ都市市民がそれを認識していたことをうかがわせている。

交易と工芸

インダス川とガッガル・ハーケラー涸河床のなす流域の大沖積平野に、少なくとも六都市があつたことはすでに見ていたとおりである。これらの都市はすべて、河岸や海岸に位置している。この都市の位置および各都市から、沖積平野には産しない銅や石材などきままな鉱物資源が出土していること、さらに、しっかりとした構造をもつ船の図柄が護符や印章に見られるなどから考えて、陸送はいよいよばく、文明ではさらに水上(河川・海洋)交通を加えた広い交易ネットワークが成立していたことが理解できる。加えて都市遺跡からは、印章や封泥、そして統一された度量衡があつたことを示す分銅なども発見されており、活発な交易活動がおこなわれていたことを裏づけている。

ネットワークは、文明版図内にとどまらない。ラッパーからは中央アジアに起源をもつ印章や石製人物像片が発見されているし、モエンジョ・ダロやロータルでは、ペルシア湾岸に分布する円形印章が出土している。これらから交易ネットワークが、文明版図外にもおよんでいたことがわかる。さまざまな人が行き交う結節点としての都市を、ここから想定することができる。

さらに文明は、ウルなどメソポタミアの諸都市との交易をおこなっていた。メソポタミア、アッカドのシャルルキン王の碑文には、「キシュの王シャルルキン、彼は三四回もの戦闘を勝ち抜き海の縁にいたるまで、「あらゆる」城壁を打ち倒した。メルッハの船、マガンの船、ティルムン〔ティルムン〕の船をアッカドの波止場に停泊させた」とある。メソポタミアの文献にあらわれる「メルッハ」は、インダス文明の展開した地域を指すと考えられている。メルッ

ハはこの碑文の年代、前二三五〇年頃にはアッカドとの遠距離交易を確立していたのである。

メルツハの産物としてメソポタミアに輸出されたものは、別のメソポタミア文献によれば、「背の高い黒檀の木、長い葦、山牛〔インドゴブウシのことか〕、孔雀、紅玉髓、黄金、銅」〔クレンゲル 1983:55〕などである。このうちとくに注目しておくるべき遺物は、紅玉髓である。紅玉髓製ビーズには、長さ一〇センチ程の中膨らみの管玉、アルカリによって腐食させ白い文様を施した玉などがあり、インダス文明の特産品として西アジアに輸出された。ウル王墓からは両種の玉が出土しており、紅玉髓製ビーズ(図8)は、威信財として受け入れられていたことがわかる。一方、メソポタミアからインダス文明に何がもたらされたかは文献に記載がなく、不明である。

対メソポタミア交易であるが、アッカド期にはインダス文明の商人が直接にウルなどに赴いていたが、のちには、ペルシア湾岸に位置する古代のテイルムンもしくはデイルムン(現在のバハレーン島とその周辺)を仲立ちにして交易をおこなうようになった。しかし、前一八〇〇年頃の古バビロニア期以降は、「メルツハ」の存在を具体的に示す記述はとだえてしまう。この時点では、インダス諸都市は活動を停止したものと考えられる。

文明の衰退

都市活動の停止は、とりもなおきず文明の崩壊を意味するが、その兆候は各都市で確認されている。モエンジヨ・ダロ遺跡では、粗末な家屋が城塞内部にまでつくられるなど、文明の特徴であった城塞・市街地の棲分けの統制が失われ、市政が混乱したことが指摘されている。ハラッパー遺跡では、都市末期に市門がその機能を失う。ロータルでは、市壁にそつてつくられた「ドック」が洪水で埋まつたまま放棄される。こうした事象は、各遺跡の層位観察や¹⁴年代データから、前一〇〇〇年頃以降に起つたことがわかっている。そして前一八〇〇年頃には、都市は完全にその活動を停止する。

都市の崩壊の原因については、文明発見当初からいまとまな議論がなされてきた。湿润であった気候が乾燥化して文明が崩壊したとする考え方、いわゆるアーリヤ人が侵入し破壊したとする考え方などが、これまで提示されてきた。しかし、これらは明確な考古学的証拠をもたず、今ではほとんど否定されている。

現在考えられているのは、乾燥化とは別の環境変動を文明崩壊の要因とするものである。前二〇〇〇年頃にインダス川の河口部からマクラーン沿岸にかけて土地の隆起があり、一時的に出口を失ったインダス川が洪水を頻発したことが第一の要因である。さらにガッガル・ハーカラー川が干上がつて、カーリーバンガンなどの流域の遺跡を放棄せざるをえなくなったことが第二の要因である。インダス本流もまた、洪水のあとはしばしば流路を変えて都市から離れた。こうした環境変動は農耕生産力の低下をもたらし、また河川の交易ネットワークの麻痺をもたらした。それによって都市は混乱し、衰退したとされている。このような環境変動の考えは、乾燥化や異民族の侵入破壊に原因を求めるよりも蓋然性が高いといえるが、考古学・地質学的証明はなお不十分であり、今後の課題となっている。

ハラッパー遺跡では都市機能が停止したのちも人びとはそこに住みつけ、インダス文明の伝統を引く村落文化のH墓地文化を開いたことが明らかくなっている。また、ロータルや他のグジャラートの遺跡も同様に、グジャラートの後期ハラッパー文化期の村落文化を開いている。このことはインダス文明の技術伝統が、その後の社会に受け継がれていたことを示している。こうした状況から、近年ではインダス文明の「滅亡」という言葉を避け、「解体」という言葉を用いるようになってきた。

とはいって、すべての技術伝統が引き継がれたわけではない。受け継がれたのは、農耕にかかわる技術と牛車などの事物、家屋の形態、土器などの日用品などである。一方、文明を象徴する、大沐浴場など複雑な構造をもつ記念建造物や排水溝などの遺構、印章や分銅、尺などの都市的遺物、そして角と植物信仰をあらわす図柄、インダス文字——これらものは文明解体後には受け継がれることなく姿を消す。これは文明版図内の各遺跡をつないでいた支配原理が喪失し

たことを物語っている。

近藤英夫

3 歴史時代

インダス文明の衰退と地域文化の成立

インダス文明は前一八〇〇年頃に衰退し、その後、前一千年紀にはガンジス川流域の開発を享けて都市が成立した。本節ではさらにその後の、後一千年紀中葉におけるガンジス川流域の都市社会の衰退、あるいは変容までを扱う。

前述のように、インダス文明の衰退の背景には自然環境の変化とともに社会の変化、または西アジア方面との交易活動の衰退などさまざまな要因が想定されるが、インダス文明の衰退が南アジア北半部における文化的な断絶を意味するわけではないことに注意する必要がある。インダス文明以前から育まってきた文化の伝統はインダス文明の衰退後の時代にも継承されており、インダス文明の衰退とはすなわち都市社会の衰退であると理解しなければならない。すなわちそれは、社会・文化の変容である。

この社会・文化の変容は、「衰退」という言葉で意味されるような否定的な意味合いをもつものではない。むしろより動的な南アジア社会の変動現象としてとらえられる必要がある。この社会・文化変容のダイナミズムはいまなお十分に理解されているとはいがたいが、考古学の資料によって、おぼろげながらもその過程の断片をうかがい知ることができる。

インダス文明は、インダス川流域とその西のバルーチスタン高原、東のパンジャーブ平原東部において成立していった諸々の地域文化を統合するかたちで、前二六〇〇年頃に成立した。広大な領域を結びつけたのがまさに文明の基盤である都市であった。このことを念頭におくと、文明すなわち都市の衰退は一つに統合された広大な地域社会の解体を意

味していることがわかる。

実際に、インダス文明衰退後の前二千年紀前半には、バローチスタン高原からパンジャーブ平原東部、ガンジス・ジャムナー^{ドーラー}・アーリア^{アーリア}地域にさまざまな地域文化が成立することになる。これらの地域文化は主としてそれぞれに特徴的な土器様式によってとらえられるもので、バローチスタン高原東縁部のカッチー平原ではピーラク文化、インダス川流域のシンド地方ではジューカル文化、パンジャーブ平原西部ではH¹墓地文化、パンジャーブ平原東部ではバーラー文化、ミターダルⅡB期文化、赭色^{レッド}土器文化などが確認されている(図10)。

これらの文化は、前述のように特徴的な土器様式によって設定されたものであるが、その内容は、インダス文明期のハラッパー式土器の要素を色濃く継承するもの、インダス文明以前のそれぞれの地域の土器様式の伝統を継承するもの、またハラッパー式土器とインダス文明以前の土器様式の融合を示すものなど、さまざまである。総じてこれらの諸文化は「後期ハラッパー文化」と一括されることが多いが、少なくとも土器という一つの文化要素のうえにおいては、インダス文明の衰退のプロセスにおいて、さまざまな伝統が互いに関係し合う状況が存在していたことを示している。

土器から見ると、こうした地域間の関係性のもとで多様な地域文化が共存していくことが推測できるが、その関係性は互いにかかわりあって都市社会を生み出すようなものではなかった。すなわちそれは都市社会に見られる強力な地域統合を志向するものではなく、むしろゆるやかな関係性と呼びうる地域間交流がこの時代の特徴であったと考えられる。

地域間交流の活発化と地域文化の展開

こうしたゆるやかな地域間交流を特徴とした社会は、前二千年紀の後半になって大きく変化する。考古学的には「彩文灰色土器」と「黒縁赤色土器」という二種の土器の出現をもって、この変化の画期ととらえることができる(表2)。

彩文灰色土器というのは、黒色の彩文を施す灰色に焼き上げられた土器である。⁽¹⁾他方、黒縁赤色土器は土器の内面と

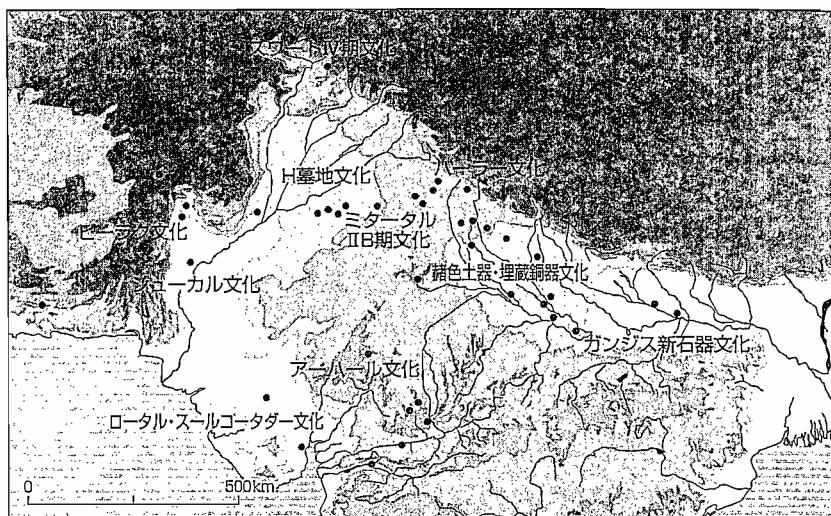


図10 前二千年紀前半の南アジア北半部

	ガンジス川上流域	ガンジス川中上流域	ガンジス川中流域	ガンジス川中下流域	ヒマラヤ山脈南麓	
西暦紀元	VII期	赤色土器段階Ⅲ期				
	VI期	赤色土器段階Ⅱ期				
	V期	赤色土器段階Ⅰ期				
	IV期	北方黒色磨研土器後期段階				
	III期	彩文灰色土器後期段階		北方黒色磨研土器前期段階		
	II期	黑縁赤色土器・黒色スリップかけ土器後期段階 （鉄器の導入）				
前1000	I期	彩文灰色土器前期段階	黒縁赤色土器・黒色スリップかけ土器前期段階			
前1500		バーラー文化	諸色土器・埋蔵銅器文化	ガンジス流域新石器文化		

↑
古代型
都市の衰退
グプタ朝

↑
都市の最盛期
クシャーナ朝

↑
都市の形成
カーンヴァ朝
シュンガ朝
マウリヤ朝

↑
拠点集落の形成?
十六大国時代

↑
地域間交流の
活発化

表2 前二千年紀後半以降の文化の変遷

外面の上半部が黒色を呈し、外面の下半が赤色をなす土器であつて、あえてそのように焼く特異な製作技術によつて特徴づけられる土器である。黒縁赤色土器は西インドから中央インド、北インド、さらには南インドにまで広がる土器であるが、各地の黒縁赤色土器はそれぞれ独自の特徴を有しており、必ずしも歴史的関係を有しているわけではない。北インドにおいては、前二千年紀前半頃からガンジス川中流域に出現し、前二千年紀後半には北インド各地に広がる。

この二種の土器の広がりに示されるのは、ガンジス平原における地域間交流の活発化という現象である。両者は製作技術を違えるが、ともに皿と鉢を基本とする食膳具からなり、両者が共通する器種構成を有するという点において、前二千年紀後半の段階で一定の関係を有していたであろうことが推測できる。この両者の関係は前一千紀前半になつてより具体的になる。

この時期には彩文灰色土器の分布域がガンジス川中上流域に広がり、黒縁赤色土器の分布域と一部重複するようになるが、両者のあいだで共通する形の土器がつくられるようになる。このことは、本来異なる製作技術を有する異なった伝統の土器であったのが、この時期に接触・交渉を深めるなかで、相互に影響を与えるようになつたことを示している。

前一千紀中頃になると、ガンジス平原東半部において北方黒色磨研土器が出現する。これは極めて丁寧につくられた薄手の土器で、黒光りする表面を特徴としている。ガンジス平原東半部にこの土器が広がることによって、ガンジス平原は西の彩文灰色土器と、東の北方黒色磨研土器の分布圏に分けられることとなる(図11)。

こうした土器の地域性が消失し始めるのが、前四～前三世紀頃のことである。考古学のうえでは「北方黒色磨研土器後期」段階と呼ばれ、歴史的にはナンド朝マガダ国による北インドの統一からマウリヤ朝の成立にかけての時期に相当する。この時期には北方黒色磨研土器が北インド東半部から西半部、さらには北西インド、東インド、中央インド、西インドといった周辺地域へと拡散する。彩文灰色土器は消滅するが、その器形はこの時期の北方黒色磨研土器のなかに取り込まれており、土器の生産体制が北インド全体で再編された状況を示している。

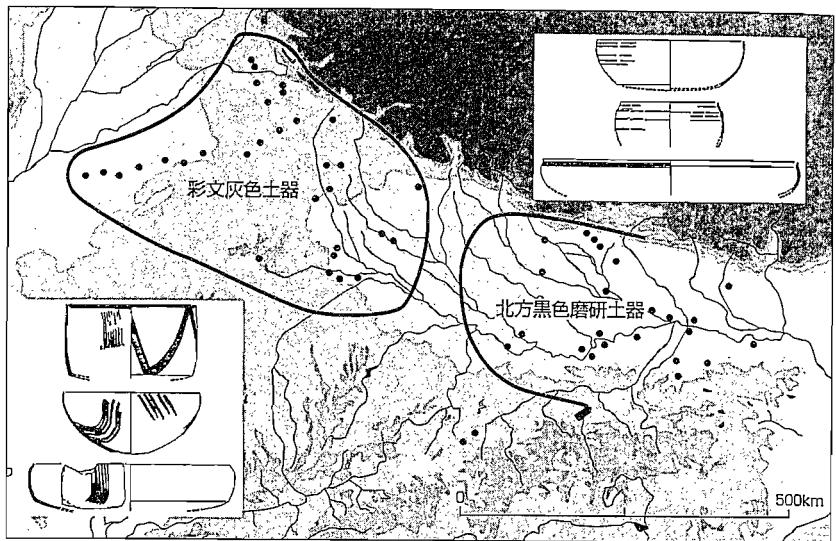


図11 前千年紀中頃のガンジス平原

また、この時期には、以前の土器の地域性を継承するかたちでガンジス平原の東西に異なる様式の土偶が出現するが、前二世紀後半頃までには北インド全域に共通する土偶様式へと収斂され、土器と同じように、北インドの周辺地域にも広がっていく。

このように、前二千年紀後半から前一千年紀後半にかけての北インドでは、大きく東西に分かれるかたちで土器・土偶に地域性があらわれ、地域間交流のもとで地域性が消失して北インドを統一する物質文化のスタイルが形成されていく過程を読み取ることができる。

また、前千年紀の前半には鉄器が普及するようになるが、その背景にはアラーワリー山脈からヴィンディヤ山脈にかけてのいわゆるガンジス平原周縁部からの鉄鉱資源の安定的供給の確保が推測される。沖積平野であるガンジス平原ではこうした天然資源は乏しく、周縁の山脈・高原地域との関係が重要であった。こうしたガンジス平原と周縁地域との関係は、考古学的にはビーズの製作に用いられた貴石にも見ることができる。

ガンジス川流域における都市の形成

前述のように、前二千年紀後半以降の北インド社会は地域間交流と地域統合によつて特徴づけられるが、それはどういった社会の背景を示しているのだろうか。

仏典などの文献史料によると、前六～前四世紀頃の南アジアには十六大国と呼ばれる国家群が北西インドから北インド、中央インドにかけて存在していたことが知られている。それぞれの国には都がおかれ、商人たちが活躍していた様子が描かれている。遺跡の発掘調査によると、前六～前五世紀頃には都市あるいは都市的な様相を帶びた大規模な集落が北インドに存在していた可能性が高い。遅くとも前三世紀ないし前二世紀には城壁を完備した巨大な都市が発達しており、前一千年紀中頃から後半にかけての北インド社会は都市化の時代であったことがわかる(図12)。

ガンジス平原の都市は城壁によって囲まれており、その内部の面積は平均で一五〇～二〇〇ヘクタールほどである。城壁の高さは五メートル以上あり、城壁の造営に多大な労働力を要することを踏まえれば、都市全体を一つのモニュメントとみなすことも可能である(図13)。

現在のところ、都市内部の構造についてはほとんど明らかになつていない。城壁の輪郭によつて示される都市全体の平面設計に規則性は見られず、むしろ不定形な平面形がめだつ。焼成レンガの建築用材としての本格的な導入・普及は前一世紀頃で、それに先行する時期には、粘土で壁体を築いた建物や木造建築が一般的であった。建物の平面形の把握が容易なレンガ積建物で見ると、前一世紀頃には方形ないし矩形の平面形を呈する建物が通りに対して直角に規則的に並ぶ、集住を原理とした空間構成が存在していたことがわかる。

このように前一千年紀中頃から段階的に発展してきた北インドの都市および都市社会は、前項において見た地域間交流と地域統合の結果として出現したものである。地域間交流が活発化するなかで、その結節点としての拠点集落が形成され、その機能が極大化したところに都市が位置づけられる。拠点集落については、その実態は不明ながら、前一千年

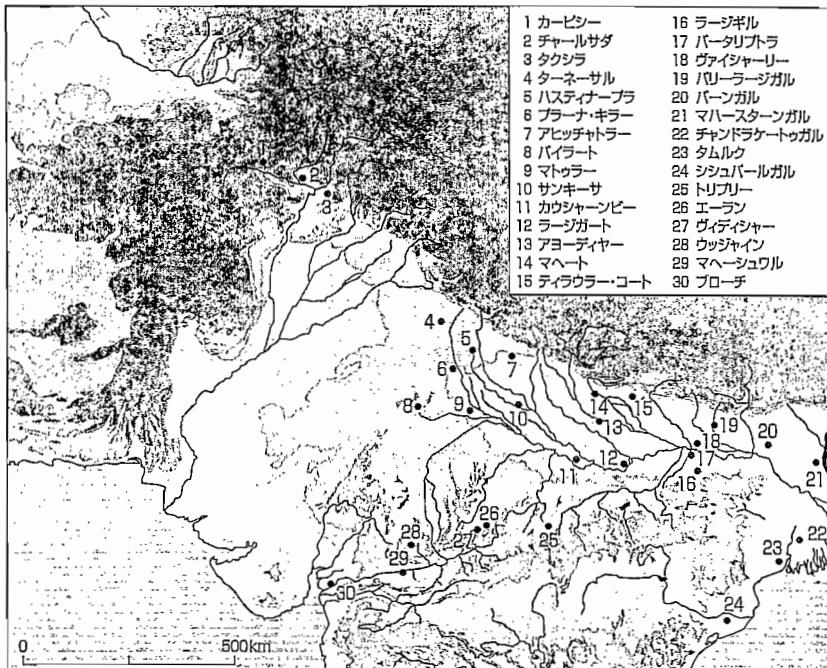


図12 南アジア北半部のおもな都市遺跡の分布

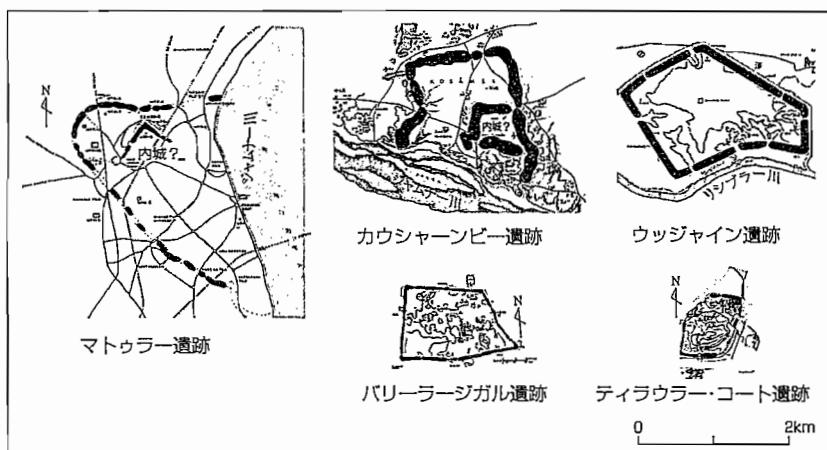


図13 都市遺跡平面図

紀前半の段階には北インド各地に出現していたと推測される。

拠点集落として地域を統合するための政治性の強化はやがて国家の都としての機能をもたらし、交易の中心としての経済性は、富の蓄積を促進することとなつたと考えられる。前述の多大な労働力を投下しての城壁の造営は、まさに増大する政治性と経済力を背景としたものにほかならない。また、前五世紀頃までには出現していたと考えられる貨幣は、こうした政治的・経済的統合という背景のもとに、統一の価値基準として導入されたと考えられる。

都市文化の成熟と衰退

紀元後一～二世紀は北インドの都市社会の最盛期であったと考えられる。その背景として、都市のネットワークが北インドのみならず南アジア各地に拡大したことがあげられる。この拡大をもたらしたのは、もちろんマウリヤ朝以来の南アジア内部での都市社会の成熟もあるが、一方ではクシャーナ朝の支配のもとで南アジアと中央アジアが強いつながりをもつたこと、またアラビア海を経由した西アジア、地中海世界との海洋交易が、前二世紀末あるいは前一世紀以降発展を遂げつつあったことをその要因としてあげができる。

北インドの都市遺跡では、この時期に焼成レンガによる建物が密集して築かれ、城壁の維持・管理がおこなわれていたことが明らかになっている。また、出土遺物には西インドとの関係を示す土器や、南インドから東インドをへて搬入されたと考えられる回転文土器と呼ばれる土器が断片的ながら出土していることも、この時期のネットワークの広がりを示している。

広大なネットワークによって支えられた北インドの都市社会も、三世紀頃から衰退の兆しを見せ始める。焼成レンガの再利用が顕著となるのがこの時期で、建物の建設にあたって新規にレンガを生産することはなくなつた。こうした兆候を受けて、四世紀に廃絶する都市が存在したことが、発掘調査および中国僧法顯法顯傳の記録にうかがうことだが

できる。とくにヒマラヤ山脈の南麓に近い地域では、シユラーヴァスティー(マヘート遺跡)、カピラヴァストゥ(ティラウラー・コートもしくはビフラウワー遺跡)、クシナガラなどの都市の衰退・廃絶が顕著である。

北インドの都市社会の衰退および封建制に根ざした村落社会の成立をめぐっては、その是非および評価に諸説があるが、五世紀頃までにいくつかの都市遺跡が廃絶することは考古学的に確認できる事実であり、そこにそれまでの都市社会の変容がかかわっていたことは確かである。

対ローマ交易の凋落やクシャーナ朝の衰退、フーナ族の侵入など、三～六世紀にかけてのさまざまな歴史的要因が北インド社会の変容に影響をおよぼしているが、社会の変容は突然に起つたのではなく、段階的なものであった。

上杉彰紀

▼補説1▲ インダス文字の解説

インダス文明の存在が一九二〇年代初めに明らかになって以来、すでに八〇年以上がたっている。しかし、その遺物に記された「インダス文字」とされるものは未解説のままである。その結果、最近それは「文字」ではなく、シンボルのようなサインにすぎないという新説も出されている。その賛否は別として、以下では、それをいちおう「文字」として解説の問題を解説しよう。

インダス文字の記された遺物のおもなものは、それが陰刻された凍石製の小さな印章、その印章が捺されたテラコッタ片、文字が刻まれた銅小片、線刻された土器、その他で、そのような遺物の総数は約五〇〇〇を数える。その八割はモエンジヨ・ダロとハラッパーからの出土であるが、一つの遺物に記された文字数は、多いもので二六、少ないもので一、平均は五と大変に少なく、そのことが解説を非常に難しくしている。すなわち、かりにそれが文字として、少数の文字列に

よつては、書かれた言語の文法的特徴が、解説を可能にするほど十分に示されないと危惧されるからである。

解説に際しての重要な問題は、それが表意文字か、表音文字かといった文字の種類であるが、それは文字の総数と大きな関係をもつ。インダス文字の場合、どれをもって一文字とするかによつて総数は異なるが、多くの研究者は、四〇〇程度の異なるた文字を数える。この数は、漢字のような表意文字には少なすぎ、アルファベットのような表音文字には多すぎ、多くの研究者は、それが表意文字から表音文字への変化をたどる過程の「表意・表音文字」であるとする。なお文字の書き順は、いくつかの理由によって右からとされている。

さて、解説が試みられたのは一九二〇年代で、当時はインダス文明 자체の研究も未熟で遺物の数も限られていたが、研究者の一人ハンターは、エジプト、シュメール、エラムの諸古代文字との関係に注目し、言語はドラヴィダ語としての解説を試みた。ヒッタイト文字の解説に大きな貢献をしたフロズニーは、その成果を研究においてはめつついンド・アーリヤ語としての解説を試み、ヘラスはそれをドラヴィダ語しながら同音異義語の存在を指摘し、「判じ絵」(rebus)を解く手法を導入した。その他、多くの研究者がさまざまな古代文字と比較して解説を試みたが、成功しなかつた。

それに転機をもたらしたのは、一九六〇年代におけるコンピュータの使用である。クノロゾフを中心とする旧ソ連の研究者チームとアスコ・パルボラに率いられたフィンランドのチームとが、同時期に別個に研究を推進した結果、ほぼ同じような結論に到達した。両チームともすべての文字資料をコンピュータに入力し、各文字が、ある切れ目のなかでどのような行動パターンを示すかを分析し、ある文字は頻繁に末尾にくる、ある二文字はしばしば一緒にあらわれる、などの特徴を検出した。

彼らは、そのような文字の行動パターンが言語の文法的特徴を示すと考え、そこから、この文字によつて書かれた言語では、修飾語は被修飾語の前におかれ、接尾辞が用いられ、接頭辞は用いられないなどの特徴があることを指摘し、そのような文法的特徴に合致する言語はドラヴィダ語であると結論したのであつた。アーリヤ語やムンダ語は接頭辞の使用によつて、またシユメール語その他の古代西アジアの言語は修飾語の後置によつて否定された。

ただし、ソ連、フィンランドの両チームの見解が一致したのはこのような言語の同定においてであって、具体的な文字の解釈について両者は異なった。パルポラは文字資料の蒐集と整理、文字コンコードансの製作に大きな貢献をし、同様にコンコードансを製作したインドのマハーデーヴァンも言語をドラヴィダ語として解説を進めているが、この三者のあいだでも見解が異なる。例えば、もともと頻繁に文末(語末)にくるある文字を、ソ連チームは格語尾の「斜格」、フィンランド・チームは「属格」、マハーデーヴァンは「主格」とするのである。

ドラヴィダ語としての言語の同定については、歴史的状況からすればその可能性は高いが、両チームのコンピュータ分析による証明を疑問視する研究者もあり、また、なおアーリヤ語として解釈しようとする研究者も少なくない。したがって言語の同定も、最終的には「解説」が成功するまで決着がつかないのである。パルポラは最近では、コンピュータ分析を離れ、ヘルスが導入した、同音異義語と「判じ絵」解説の手法によって、個々の文字や単語の意味を確定していくとしている。

彼の判じ絵解説の手法は、「言語がドラヴィダ語である」と前提に、そこに見られる同音異義語の存在や、印章などに描かれる絵柄とサインの組合せなどを手がかりにして展開される。魚のサインが星をあらわすとするのは前者の例であり、それと数詞などの組合せにより、北斗七星や古代ドラヴィダ人の神ムルガンが同定されたりする。彼によれば、時間はかかるが、この方法によって一步一歩解説に近づいていくことができるという。

そのような状況のなかで二〇〇四年、前述のように、「いわゆる「インダス文字」は「文字」ではなく、紋章や呪術的シンボルのようなサインにすぎない」という説が若いアメリカの研究者(S・ファーマー)によって提唱され、それにコンピュータ言語学者(R・スプロート)とインド古典文献学者(M・ヴィッシュワル)が同調して、波紋が広がった。文字説に対する新説の批判点は、一回しか用いられないサインの数が多すぎる」と、一資料のなかに同一サインの不作為の繰返しが見られないことであるが、バルポラは、初期の表意・表音文字では一回しかあらわれない文字も多く、短いテキスト中にも同一サインの繰返しが見られると反論している。

しかし、この新説提唱者と從来からの文字説支持者の論争はこれからであり、その行方が注目される。ただ、それがかりに文字だとして、前述したように一資料中における文字数が少ないと並んで、この文字が使用された期間が数世紀と短いために、初期のものと後期のものとのあいだに解説に手がかりを与えるような変化がなく、また、ヒエログリフの解説に決定的役割をはたしたロゼッタ石のような多言語併記の資料がない」とも解説を困難にしており、解決への道のりは険しい。

辛島 昇

▼補説2 ▲ インド考古学を担つた人びと

考古局の発足から大発見の時代へ

インドにおける広義の考古学は、十八世紀の「インド学」研究を母体にして始まるところである。ことに一七八四年に、法律家でもあったヴィリアム・ジョーンズによって設立されたベンガル・アジア協会の活動が注目される。同協会はイングランドを中心とした東洋学研究を広く推し進め、古典文学・哲学・史学がそのおもな研究分野であったが、コールブルック、ウィルキンズ、ウィルソンらによる初期の研究活動のうちには、先史時代の岩陰画や仏教遺跡の古代遺物の研究もすでに含まれていた。なかでも碑文や古銭学は、造幣局員でありますながらアショーカ王法勅を解説したアジア協会幹事のジェームズ・プリンセプの強い関心事でもあって、それらはウィルソンらの担つた仏教学への関心とともに、ややのちのアレクサンダー・カニンガムの仕事に受け継がれている。

カニンガムはイギリスの士官学校卒業後、一八三三年にベンガルに赴任して軍務に就き、以来半世紀にわたってインドに滞在、数百の遺跡を踏査してインド考古学の確立に努めるが、当初はアジア協会に古銭学の論文を発表するなど、古代史の分野に強い関心を示していた。しかも彼は、公務の片手間におこなうような好古・古物学的研究にはあきらまず、遺跡の実地踏査とその詳細な記録、また当時放置されるがままになっていた遺物・遺跡の科学的保存の必要性をも痛感して

いたために、つとに一八四八年、これらの作業を公的にインド帝国全土にわたって展開するインド考古学調査局(以下、考古局)設立の陳願書をインド総督に對して提出する。この段階ではまだそれは認められなかつたが、そのねばり強い活動によつて、やがて彼は一八六一年に考古学調査官に任命され、翌年には初代長官となつて、今も考古学的発掘調査とその行政の中心を担うインド考古局が正式に発足した。今から一四〇年余りも前、日本では幕末の文久年間のことである。

この時代のインド考古局は、主として初期歴史時代の遺構や遺跡、ことに北部一帯から西北部にかけて見られる第一級の仏教遺跡や美術作品をつきつけと明らかにして精緻な踏査の記録を残すかたわら、その保存・修復にも意をそそいだ。その結果は全三三巻にもおよぶ膨大な報告書として刊行され、また基本的な碑文や古錢の集成をはじめ、唐僧玄奘(カレン・ザン)らが遺した史料と現地踏査をつきあわせた結果に基づいたインド古代地理学など、その後のインド考古学の發展に大きく寄与する業績を多々残した。この時代にはまた、建築史家ジョームズ・ファーガソンによる全土にわたる古代建築の精査がおこなわれ、またカニンガムの目が届かなかつた南部ではロバート・ブルース・フートが前期旧石器を明らかにし、さらにメドウズ・ティラーが、やはり南部に特異な巨石遺構を特徴とする文化を跡づけた。しかし、一八八五年のカニンガムの退官後は、第二代局長となつたジェームズ・バージェスもまた南インドの寺院建築や石窟寺院群に目を向けて北インド一帯を精査したカニンガムの欠を補つたが、概してこの時期、考古学的活動は、世紀末まで一時沈滯した。

その活動が爆發的といえるほど再び活発化するのは、一九〇一～二八年の長きにわたつて考古局長を務めたジョン・マーシャルの時代である。彼は若くしてすでにそれ以前にギリシア、クレタの発掘に從事していたが、総督カーラン卿に呼ばれた彼はカニンガムが為しえなかつた数々の重要な遺跡の発掘をおこない、ことに未知の文明・インダス文明の発見と、ハラッパー、モエンジョ・ダロの二大都市遺跡の大規模な発掘調査は世界の耳目を集めめた。マーシャルはまた北西部のチャーリサダ(ブシュカラーヴィアティー)やタクシラ(タクシャシラ)遺跡の層位的発掘をもつてガンダーラ文化の編年を確立し、中部インドではやはりサールナートやサーンチーなどを大々的に発掘して、初期歴史時代の仏教文化諸遺跡を考古学上位置づけた。これらの第一級の古代都市址や仏教寺院址の発掘はいずれも大部の報告書にまとめられ、今なお価値の高

い基本文献となつてゐる。

この時代にはまだ、考古局の派遣ではないがオーレル・スタインによる中央アジアから南西アジアにかけての遺跡の踏査がおこなわれ、多数の文物がもたらされて、その一部は今もデリーの考古局に保管されている。マーシャルがインド人考古学者を育成したことも特記に値し、そもそもインダスの二大都市の発見・発掘にもインド人考古学者が大きくかかわつていたことを忘れてはならない。マーシャルは退官後もなお一九三四年まで考古局に関与して後進の指導にあたるが、その後のやや沈滞した時期においても、K・N・ディーケシトやN・G・マジュムダルらによつて先一原史時代に属する諸遺跡の踏査がおこなわれた。その報告書はインド人学者による初期の貴重な貢献であり、ある意味ではこれもマーシャルとの輝かしい時代の遺産といつてよい。

近代考古学の導入と独立後の展開

その後インド考古学は、厳しい植民地行政下にあつたことと戦雲をはらむ国際情勢もあつて沈滞の時期を迎えるが、その復興のみならず、インドにはじめて近代的な考古学の方法を導入して新時代を築いたのが、一九四四年に招かれて考古局長の職に就いたモーティマー・ウェーラーであった。彼は若くしてインドに招聘されたマーシャルとは異なり、来印以前にすでにウェールズ国立博物館長、ロンドン大学考古学研究所所長などを歴任しており、また軍人としての功績もあげていたが、イギリスを中心としたローマ期遺跡の発掘調査経験もかわれて、独立直前、風雲急を告げるインドに急遽赴任することになった。

彼のローマへの強い関心は、南インド・アリカメードウなどの発掘成果を含めた主著の一つ『ローマ帝国の膨張』にも反映しているが、彼が「ミッショント」(回顧録『インド・パキスタンへのわが使命』)としたのは、新生インドとパキスタンに近代考古学を定着させること、かつそれぞれの地域における未知の編年の確立であった。かくて彼は、印度赴任の一九四四年、ただちに北西インド・ガンダーラ文化の標準遺跡タクシラで新たな発掘を開始、同地でインドの若い考古学者たちに対し、徹底した層位学的発掘とその詳細な記録法の訓練をおこなつた。俗にいう「タクシラ学校」がそれで、四七年

のインド・パキスタン分離独立後に両国の考古学を担う研究者・行政官がそこから数多く育つていった。

彼はインダス文明の標準遺跡であるハラッパーも再発掘の対象とし、さらに北部ではガンジス平原部のアヒッチャトラー、南部ではデカン高原のブラフマギリなどでの「問題解明型」の発掘をおこなって、インダス文明期以降初期歴史時代の開始以前にいたる、いわゆる「暗黒時代」の解明に尽力した。それはいかにして地域・時期・文化上の空隙を埋め、実年代上の定点を得てこの広大なインド亜大陸の編年を確立するかの、彼一流の大作戦であった。行政上も彼は辣腕をふるい、インド全土を七つの管区(サークル)に分け、各地域における大規模で組織的な発掘と、危機に瀕していた文化遺産の科学的保全に尽力した。これらの考古学的活動は、博物館とともに大幅に改組され、中央・州レヴェルに分けて徹底管理がおこなわれた。碑文局とその出版活動も強化され、一九四六年からは、研究紀要『古代インド』誌がつきつきと出版されて、重要な論考や発掘報告がなされた。それが第二次世界大戦の終戦直後、インド・パキスタンの分離独立直前のことであつたことは驚異的である。

そして一九四七年、旧英領インドは二つの国に分離独立し、イギリス人はインドを去り、ウィーラーもまたイギリスに帰国した。しかし分離独立によってまったく新たに考古局を創設せねばならなくなつた新生パキスタン政府は、その顧問として再びウィーラーを迎えて、その活動を開始した。すなわち五〇年にはカラーチーに国立博物館が、翌年には発掘調査部門が創設され、ウィーラーの指導のもとにモエンジョ・ダロ(五〇年)やチャールサダ(五八年)の発掘が再開された。一方、イスラーム共和国として発足したパキスタンにとって、インド亜大陸に初めてイスラームがもたらされた八世紀のシンド地方の発掘も急務であり、こうしてインダス川河口のバンボールや、やや内陸のマンスーラなどが発掘された。長く考古局長を務めたF・A・ハーンは自らコート・ディジー遺跡を発掘してインダス文明の起源を探つたが、ラーホー、ムルターン、ウツチュなどにおけるイスラーム文化遺産の歴史研究と修復保存も、アフマド・ナビー・ハーンらによつて積極的におこなわれた。

一方インドはインダス文明の二大都市遺跡をパキスタン側に失つたことから、パキスタンと境を接する北西ラージャス

ターン沙漠の踏査にあたり、インド考古局長A・ゴーシュらは、旧サラスヴァティー川と思われる涸河床沿いに、都市遺跡カーリーバンガンを含む数多くの先一後ハラッパー期の遺跡を跡づけた。ややのちに、その西側の延長であるチヨーリスタン地方にも同様かそれ以上の数の遺跡が分布することがパキスタン考古局のM・R・ムガルによって報告され、インダス文明の展開に関する問題解明への大きな手がかりを与えていた。インド側ではまた、グジャラート州にもロータル、スールコータダ、ドーラーヴィラなどの重要な都市遺跡がつぎつぎと発見されるにいたっている。

他の地域においても、インダス文明後の文化展開を考古学的に明らかにする発掘・踏査が両国ともに活発であるが、それには考古局のみならず、大学や研究機関の寄与も大きい。インドではインダス文明期以降のデカン金石併用期諸文化ほか石器文化にも取り組むプネー大学デカン・カレジや、ワローダラーのマハーラージャ・サヤジラーオ大学、ガンジス平原とその以東の文化に取り組むバナーラス・ヒンドゥー大学やアラーハーバード、パトナ、カルカッタの諸大学、また南部ではマドラス大学、タミル大学などの名があげられ、同様にパキスタンでも、ペシャーワル大学、パンジャーブ大学、シンド大学などの活発な考古学的活動が見られる。それでも、その広大さから、インド亜大陸の考古学的可能性はいまだ無尽蔵である。

注

- (1) この彩文灰色土器はつとにB・B・ラールをはじめとするインド人研究者たちによって、インド・アーリヤ系民族、すなわちアーリヤ人の土器である可能性が指摘されてきた。現在もこの説を探る研究者は多いが、一方で土器をはじめとする物質文化と言語学的に定義された集団を一対一で対応させることができないという方法論的問題点の指摘もあり、その評価は定まっていない。注意しなければならないのは、この土器がパンジャーブ東部を中心とする地域で出現したものであって、インド・アーリヤ人が侵入してきたとされる西方諸地域にはこの土器が分布していないことである。つまり、あくまでもこの土器は、前二千年紀後半のガンジス平原という歴史的・空間的脈絡のなかで出現した文化要素なのである。

小西正捷